鳳仙花

ほうせんか

中上健次

新潮文庫

鳳仙花

新潮文庫　な－11－1

昭和五十七年十月二十五日　発行
平成元年八月三十日　四刷

著者　中上健次
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六－五一一一
編集部（〇三）二六六－五四四〇
振替東京四－八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Kenji Nakagami 1980　Printed in Japan

新潮文庫

鳳仙花

中上健次著

新潮社版

2010

鳳

仙

花

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

櫛

紀州の海はきまって三月に入るときらきらと輝き、それが一面に雪をふりまいたように見えた。フサはその三月の海をどの季節の海よりも好きだった。三月は特別な月だった。海からの道を入ってフサの家からすぐそばにある寺の梅が咲ききり、温い日を受けて桜がいまにも破けそうに蕾をふくらませる頃、フサがいつも使い走りする度に眼にする石垣の脇には、水仙の花が咲いている。今年もそうだった。その水仙の花を見つけた時、近所の酒屋の内儀から「はよ、走って行って来てくれ」と言いつけられた小間使いを忘れて、走るのを止め、肩で息をしながらしばらくみつめていた。その白い花弁の清楚な花が日にあたっているのをみつめていると、胸の辺りが締めつけられて切なくなり、涙さえ出た。

その花が咲く度に春が来る。フサが生れた三月七日という日が来る。フサはその日がまもなく来て十五になると思い、紀伊半島の、一等海にせりだした潮ノ岬の隣の古座というところに根付いた水仙の一群が、日を受けて花を付けているのを見て、人の都合や思いの届かないところに、人も花も石垣も包み込むような大きなものがあるのかもしれない、と考えたのだった。

フサは悧巧な娘だったが、元より十五になろうとする子に、隣近所の老婆らが口にする有難い阿弥陀如来の話も、三人ほどいる兄らが古座の集会所に来た講釈師を聴いて「涙が出たわい」と言う石童丸の話の内容も、充分解るはずもなかった。ただ、老婆や母が言う、思わず有難うございますと手を合わせるようなものが、この石垣の脇に、人にふり返りもされずに咲いている花を包んでいると思い、早く使い走りに行かなければ内儀から小言を喰うと思いながらも、立ちつくしていた。

三月七日は四日あとの事だった。フサの母親も、福井まで出稼ぎに行ってもどって来たばかりの幸一郎という齢の離れた一番上の兄も、フサが昼だけ小間使いや子守りをする酒屋からもどってもすっかり忘れてしまったように他事にかまけていた。フサはそのことを、いつもの事だと気にかけなかったが、心の中では、自分のあの秘密を母や兄が思い出したくないからだと思い、芋を蒸すためにかまどに火をおこしてわざとけぶらせ、それにむせるふりをして泣いたのだった。

三月のものはすべて好きだった。フサは海辺に立ち海を見ながら、三人いる兄らが、古座から船に乗り汽車に乗り出稼ぎに行った先で眼にし「言うて」とせつくフサに語ってくれるきらきら光る雪の野原、雪の山、いち時に咲いた金沢のケンロクという所の大木の桜を、いつもそうするように海に重ね合わせてみた。青い海は沖の方までさえぎるものなく日にきらめきながら風に波立っているが、その海を兄たちの見た雪で飾るなら、それはこの古座に住む者の誰も眼にした事のない風景だった。雪の海は眩しかった。兄が話す、怖ろしいほど沢山の花が重な

り合ったケンロクという所の桜をこの海に敷きつめたなら、フサが毎日通って守りをしている、酒屋の一歳になる女の子に飾った雛人形よりも綺麗になる。

フサは雪のはねかえす光が眩しいというように眼を細め、その雪の海の方へ、かりかり音たてさせながら歩いた。潮風が吹きつける。髪が乱れてその髪の間から飛び出した耳が冷たく、フサは手でおおいこすった。いつも夜聴える潮鳴りのような音が耳に立ち、温く熱くなってくる。

フサはそのほてった温い耳に、潮風が心地よくあたるのを感じながら、波の前に立ち、その打ち寄せては返す波の呼吸のような動きを見ながら、夜半、ふと眼ざめて母の寝姿を見ていたのを思い出した。

眠っている母は、昼間とは違い随分年老いて見えた。母の静かな寝息といまにも土間の昏りまで這い寄って来そうな波音が重なり、母が三人の兄や三人の姉には話しても、自分には話さない事が、ふと思い出された。兄や姉たちがつくりあげ、近所の者らが真に受けたことが、嘘ではなくて本当だったと、あらためて思った。フサはいっそ海の中に溶けてしまいたいと思い、それから、自分では誰にも言わず、黙って姉たち三人のように他の土地の紡績に働きに出れば済んでしまう事だと思い直し、笑みを顔に浮かべてみた。

フサは近所の誰よりも色が白く、眼鼻立ちの整った器量よしだった。だがそれがフサに重荷だった。一度、一等上の兄の幸一郎が、たまたま山仕事で近所の若衆と一緒になった時、「別嬪さんで大島へでも尾鷲へでも、遊廓じゃったら高い金で売れるんと違うんか」と、フサについて若衆が言ったので喧嘩になった事があったが、フサはその時も、体に出来たアザを見せて

いる兄の幸一郎を見て、単にフサの器量ではなく、兄や姉たちの誰とも顔つきが違うというあの事が、喧嘩の原因だということを知っていた。

フサはたまらなくなり、波に足をつけた。

そのフサを松林の方から誰かが呼んだ。声の方を振り返ってフサは松の幹に手をかけて、フサより六つ離れただけの吉広が立っているのを見つけた。吉広は海が眩しいと眼を細め、

「今、来たんじゃ。ええもん買うて来たった」

と手招きし、大声でフサにすぐ家へ来いと言った。

駈けて来て息を弾ませながら横に立ったフサの頭を吉広は子供にするようにくしゃくしゃと撫ぜた。フサは吉広にそうされる事が嬉しいのに、

「もう子供と違うのに」

とふくれっ面をつくって見せた。

随分大きくなった、と吉広は言った。

吉広は一年ほど他所の土地へ働きに行っていたのだった。吉広の体から他所の土地のにおいが立っているような気がした。フサは長い間、古座にいなかったその一等下の兄の吉広に、海と川と山しかないこの古座とはまったく違う他の土地の話をいち時に聞きたかったが、吉広が自分のそばに立って白い歯を見せて笑みを浮かべていると思うと、駈けて来た息の弾みが悲しくて、べそをかきかかった。吉広にみつめられるのが羞かしくもあった。

吉広はそのフサには頓着しないで上衣に手を入れ、「ほら、これ」と緋色の和櫛を取り出し

て見せた。その兄の手の甲にいままで眼にした事のなかったような傷跡があった。それをみつめているフサの髪に、吉広は「どら」と身を屈めて和櫛をつけた。

吉広はフサの顔を身を屈めたまま左右から見て、独りで得心したようにうなずき、「よう似合うど」と言った。

「家へ荷物置いてすぐ母さんに訊いて、フサが去年の春頃から、斎藤へ子守りに行っとると言うから、斎藤へ行ってみたら使いに出とると言う。それでしようなしに家へ帰ろと廻り道したら、このベッピンさんがここにおった」

吉広は言い、それからフサの顔をのぞき込むように見て、フサの黒目がちの眼に、他所の土地の出稼ぎから帰った自分が映っているのを確かめてから、「フサも、もう十五になるんじゃね」と言い、今度は一人前の娘にそうするように、フサの髪にうしろから手を触れる。

フサは兄の吉広に言われて、ふと、自分が母のそばにいつまでもいられる年齢ではなくなっているのを知った。三人の姉は、フサの齢ではもうすでに他所の土地の紡績工場に働きに行っていた。

先に立って歩く吉広は、子供の頃に何度も通った浜の松林から製材所の塀横を抜ける近道を通らずに、遠廻りして川口に一旦出て、海からの潮風を防ぐために丸い石を積みあげた石垣の横の坂道を抜けて、家の前の狭い道に出た。フサは自分の前を大股でゆっくりと歩く吉広に、一年前に出稼ぎに行った時とまったく違わない状態で、川口には舟がある事を言いたかった。だが、吉広は、男にはそこが昔のままであろうとなかろうと興味はないと言うように、振り返

试读结束：需要全本请在线购买：www.ert

りもせずに歩いていく。

その川口は、古座で生れた子供らには夏の格好の遊び場所だった。船が何隻も絶えず入っていた。海岸が、岩場かそうでなかったらこの古座のように波打ち際から急に深くなっているところなので、漁師たちの船は川口に繋ぐしかないし、それに山また山のここは、道路をつけようにもつけられない。それで何もかも川に頼ったので、子供らの何人かは川遊びをしていて船の下に潜ったままだったり、山から切り出し筏に組み川を流して来て船に積みかえる、その筏の下に入り込んだまま溺れて死んだ。だが、船くぐりも筏くぐりも面白い遊びだった。泳ぎを覚えるには、あの筏とこの筏の間と目安をつけるのが一番便利な方法だった。フサもそうやってこの川で泳ぎを覚えたし吉広もそうだった。

家にもどって思いがけなかったのは、日置川奥の田ノ井の叔父も来ている事だった。叔父はいつものように、上半分脱いで赧らんだ肌を見せて酒を飲んでいた。叔父はフサを見つけると、手招きして、横に置いてある一升瓶を持ってこの茶碗に酒をつげと言い、フサが母の眼の合図に促されてそばに坐って酒をつぐと、「よし、よし」と一人でうなずいて茶碗を置き、脱いだ服のポケットをさぐって、「あんまり金ないんじゃ」と言い、それでもフサの一月分の子守り賃にあたる金を取り出した。フサはその叔父が、随分以前から古座へ来る度に、母にそれまで外で働いた金の大半を渡してやっているのを知っていた。それが子供心にも、叔父が七人の子を抱えた母を不憫だと思っての事だろうと、推測された。

フサは母を見た。母がうなずいた。

母の顔に暗い翳りのようなものがあるのを知り、フサは思い出した。

その話を母は、何度もフサに語った。

フサの母は、遅く生れたフサにむかって、まるで洗いざらいぶちまけて話す事が、フサに対する自分の唯一の務めのように、夜、雨が降り風が出て眠れず、いまにもこの家を飲み込んでしまいそうだというフサに、「津波や洪水が、こんなふうな雨で起きよかよ」と言って笑い、母が子供の頃の話をしはじめる。話に出てくる母の父親は、フサからは祖父になるが、フサが見た記憶はなかった。祖父はよく、田ノ井から古座川奥を山を越えて歩いて古座のこの家にまでやって来て、母やその子らに食べさせろと、田ノ井の畑でつくった物、豆や南瓜やウリを持って来た。それらのことごとくは、何十時間もかけて歩いて来て、日にさらされているので、萎れていかにもみすぼらしかった。

「爺、こんなに萎れてしもとるわだ」と或る時、幸一郎が祖父に言う。「豆も南瓜も田ノ井だけにしかないんやったら、萎れてもしようないけど、古座にも売っとる」

母のトミの話には、声色が入っていた。

フサはそのトミの話をまんじりともせずに耳にした。その話をする時はきまって、三人の兄らがそれぞれ外に働きに出かけて家にはトミとフサしかいない時だったので、フサはその自分の事を知る前も知った後も、四十を過ぎて生んだ遅い子であるフサに、トミが何かを教え伝えようとしている事は理解した。

木犀の甘いにおいが寺の方から流れて来て、もう随分古くなった家のはがれかかった板壁か

ら流れ込んで来るのが分った。

フサの母のトミは、田ノ井で生れた。トミの母親は長男を生み、次にトミを生み、次男を生んですぐに、トミが五歳の時に死んだ、と聴かされていた。その作り話をトミは、育てられた祖母（フサの曾祖母）マスから聴いたのだった。実際は駈け落ちしていた。

母親がいなかったので、トミたち兄弟は、祖母が寝込んでしまうまで、ほとんど祖母の手一つで育てられたが、祖母はトミにも男の兄弟らにも母親が死んでこの世にいないと言いはしたが、決して自分の口から、男と駈け落ちしたとは言わなかった。

トミが、自分の母親が男と駈け落ちしたと知ったのは、丁度自分も、日置川の奥の山から材木を運び出している木馬（きんま）引きの男と、駈け落ちしてからだった。山の斜面を利用して足場を組み、丸太を並べて軌道をつくり、木馬と呼ぶ木ゾリに、切り出した材木を何本も乗せ、その木ゾリにゆわえつけた帯ひもを肩で引くのが木馬引きだった。男はそれをやっていた。木ゾリが重いために、軌道にまいた油でいつ足を取られて木馬の下敷きになるかもしれない、危ない仕事だった。

母のトミは、古座に来た田ノ井の父親に、その木馬引きの男と世帯を持った自分を見つけられた時が忘れられないと言った。父親はそれまで、声ひとつ荒げた事のない優しい男だったが、その時も、祖母も心配しているし一緒に帰ろう、と言うだけだった。トミが、もう上の幸一郎を孕（はら）み七カ月になると言うと、声を震わせながら初めて、死んだと言ってきたトミの母親が、実は男と駈け落ちしたのだ、と言った。

父親は、トミから眼をそらした。
トミはそう言って、フサに、
「そこに坐って……」
と、土間からのあがりかまちを指さした。
それっきり父親は、トミの顔を見ようともせずに長い時間黙ったままで坐り、それから、眼をそらした姿のまま立ち上がり、物も言わずに家の外に出ていった。トミは泣いた。
父親が再びトミの家に来たのは、そのトミの夫になった男が、木馬に圧し潰されて死んでからの事だった。トミは四十を越えようとしていたし、父親も老けていた。「そんなもん、古座にも売っとる」と幸一郎が何気なしに言った言葉を今思い出すと、父親の気持を自分がひとつも分ってやらなかった、とトミは後悔する。
フサは、母のトミのその言葉が自分にむかってのものだったような気がした。普段は忘れているが、家から寺の前を抜けた通りに面した酒屋で、泣きしぶりフサの手ではどうしようもなくなった子供を内儀が抱き、「お雛様、可愛いよ」とあやしているのを見て、ふと母の言葉は、フサに対する弁解だったのかもしれない、と思った。
内儀は頬ずりして歌を小声で口ずさむ。フサにそんな事はなかったのだった。
その光景は、実際に、フサが眼にしたものではないのに、フサには何もかもありありと見えるのだった。それを誰から聞いたのでもなかった。
フサが母の腹に入ってからの事だった。

その頃は兄らも近辺の山へ材木の下刈りや枝払いには行っていたが、まだ今のように古座を離れて他所の土地へ働きに出かけるという事はまだなかった。三人の姉らの内、二人が古座の網元に女中に行っていたが、自分らがそこで働きやっと食べさせてもらうのが精一杯で、家は今とは較べものにならないくらい苦しい暮らしだった。

十二月に入ると、その年は急に冷え込んだ。暖い古座でみぞれが降った。その母を見つけたのは、一等上の兄の幸一郎だった。それは何でもない光景と見かねないほど、いつも見あきた光景だった。母は土間に木屑を置き、一本一本、二つに折って、かまどにくべる薪の上に並べて置いていた。木屑は、松林に抜ける道の製材所から拾い集めてきたものだった。材木から角材を取った後の、それでも充分薪として使うなら火持ちのする厚さはある。母はそれを、両方の角を持って顔を赧らめるほど力をこめて折ろうとし、それがかなわないと、腹に勢いをつけてうちあてて折ろうとする。

幸一郎は声を呑んだ。日の射さない土間で、何度も腹に木屑を当て、勢いをつけて折ろうとする母は、力をこめる度に息のつまった声を出した。その木屑の打ち当てられる母の腹が、もう誰の眼から見てもはっきりせり上がって見えるのは確かだった。十二月に入って腹の中の子、フサが七カ月になるのは幸一郎には分っていた。

腹に木屑を思いっきり打ち当て、木屑が折れた。腹が痛むのか、母は、呻きながら身を折って土間にしゃがみ込んだ。幸一郎が見ていると、母は、腹をおさえてのろのろと起き上がり、また新たに木屑をつかもうとする。

戸を開けた音に母は驚いて振り返り、「誰な？」と言った。それから、外から入って来てズボンのポケットに両手を入れて立ったのが長男の幸一郎だった事に気づいて、額に流れ出た汗を手の甲でぬぐった。それから幸一郎が黙ったままなので気にせず、木屑を折る仕事をやりとげようとするように、木屑の中から一等厚い木屑を選び取る。

幸一郎は、その木屑を取り上げた。その途端に眼から涙が吹き出て、なんでそんな事をするんな？　なんでそんな事までせんならんな？　と言い、問い詰めようとしたが言葉にならなかった。幸一郎は、そこまで腹の中で育った子、フサに、何の罪がある、と言いたかった。

実際、次の年の三月に、フサは下の兄の吉広と六歳ほど離れて母の四十の子として生れたのだが、体のどこに母が思い込んだ罪や羞かしさを刻まれている訳ではなかった。だが、フサはその時、母に打たれた木屑の跡が、自分の眼では見えない背中にあるような気がする。母がその時、そうやって堕胎しようとしていたのを止められ、負うた子に説教されるように、今まで親の言う事をきかない腕白者の無頼者（やくざもの）だといっていた幸一郎に、「産んだらんしよ」と説教されて産み落されたフサには、そうされた事が、取り返しのつかない傷そのもののような気がするのだった。

フサはその光景を思い出す度に、今一つ母の腹に打ち当てる木屑が強く当っていたら、自分がここにいて、日を受けた木々の梢（こずえ）が風に揺れて光の滴を撒（ま）き散らすのも眼にする事はないのだと思ったのだった。

母が七カ月の腹になって初めて堕胎しようと、医者へも行かずにそんな事をやっているには

试读结束：需要全本请在线购买：www.ert